

英語的な表現と日本語的な表現

“*Englishness*” and “*Japaneseness*”

李 春 喜
Haruki Lee

These research notes are about “Englishness” and “Japaneseness.” This theme has been explored by many researchers, and this research notes are also based on work by the Japanese linguist, Yoshihiko Ikegami.

These research notes are divided into four sections. The first section deals with the “*mono*” language and the “*koto*” language. English focuses on “things [*mono* in Japanese],” whereas Japanese focuses on “events [*koto* in Japanese].”

The second section discusses the “HAVE” language and the “BE” language. English is likely to use “have,” the verb of possession, in occasions in which Japanese uses “be,” the verb of existence or a copula.

The third section, by focusing on verbs, points out how strong the subject of the English language controls the rest of the sentence.

The last section discusses the language of “*suru* [“do” in English]” and the language of “*naru* [“become” in English].” In Japanese, “*suru*” means that “somebody does something,” whereas “*naru*” implies that “an event occurs as if of its own initiative.”

In conclusion, those notes indicate that the differences between English and Japanese reflect cultural differences inherent to the English speaking and the Japanese speaking people’s attitudes toward life.

キーワード

「する」と「なる」、「モノ」と「コト」、「BE 言語」と「HAVE 言語」

I. はじめに

英日翻訳というのは、英文読解と違って、書かれている英文を理解することが目的ではない。英文読解では、英文を読んで理解できればよいが、翻訳の場合、理解した英文を読みやすい日本語で表現できなければならない。私たちは日本語が母語であるため、誰でも日本語が書けると思い込みがちであるが、実はそうではない。もちろん、友人に送るメールや、自分だけが読

む日記であれば、自由に日本語を書くことができる。しかし、翻訳で書く日本語は、メールや日記に書く日本語とはまったく違う。なぜなら、自分のことをまったく知らない人が自分の文章を読むからである。自分のことをまったく知らない人に対して、自分が考えていることを分かりやすく書くのは、思いのほか困難なものである。そこでこの研究ノートでは、英語という言語と日本語という言語を比べて、英語的な表現と日本語的な表現はどう違うか、いくつかの特徴について考察してみる。

なおこの研究ノートは、池上嘉彦の著作をもとに構成されている。用いられている例文はほぼすべて池上嘉彦の著作からの引用である。本稿を読んで、英語と日本語の違いに関心をもたれた方は、巻末の引証文献を読み進めていただきたい。

Ⅱ. 「モノ」的な言語と「コト」的な言語

John Hinds が挙げているように、家族で食事をしているとき、誰かがミルクをこぼすと、日本語なら「あっ、ミルクがこぼれた」などと言う。英語の場合、“Oh, no, she spilled milk” (Hinds 27) のように主語を明示し能動態で表現するのがふつうである。つまり英語の場合、誰がミルクをこぼしたのかという情報が欠かせないものであるのに対して、日本語では、誰がミルクをこぼしたのかということよりも、何が起こったのかという出来事の方に関心が向けられる。

このように、同じ出来事を経験しても、それを言語化する際、英語と日本語とでは言語化された表現に違いが生まれる。そこで本稿では、これまでに積み重ねられてきた英語と日本語の表現の差異の研究をとおして、英語から日本語への翻訳について考えてみる。

池上は「表現構造の比較—〈スル〉的な言語と〈ナル〉的な言語」において、以下の例を挙げている。

“One of the jurors had a pencil that squeaked. This, of course, Alice could not stand.” この英文は、「陪審員の一人がキーキー音を立てる鉛筆を持っていた。これにはもちろん、アリスは我慢がならなかった」と訳すことができる。しかし、アリスが我慢できなかったのは「鉛筆がキーキーとなること」だったのか、それとも「キーキーと音を立てる鉛筆というもの」だったのだろうか？

池上は同じところで次の例を挙げている（池上、「表現構造」80-81）。

学校で子どもたちの合唱が始まったとき、「全員の合唱が始まった」と言うこともできれば、「全員が合唱を始めた」と言うこともできる。前者は、「合唱という出来事」に関心が向けられているのに対して、後者は、「合唱し始めた人」に関心が向けられている。つまり、前者は「コト」的な表現で、後者は「モノ」的な表現とすることができる。以下の例文1～4は池上の『「する」と「なる」の言語学』の「〈くする〉的な言語と〈なる〉的な言語」を参考にしたものである。

1. I understand you. あなたのおっしゃることは理解できます
2. I don't believe you. あなたのおっしゃることは信じられません
3. You can't say that. そんなことを言っちゃだめよ
4. You love John, don't you? ジョンのことが好きなのね？

これらの例文から分かるように、英語では、理解されたり、信じられたり、言ったり、好きになったりするのには you や that や John という「モノ」だが、日本語では、「おっしゃること」だったり、「そんなこと」だったり、「ジョンのこと」だったりする。このように、英語は「モノ的」な事柄に、日本語は「コト的」な事柄に関心が向けられる言語だと言える。それが顕著に表れている例を池上の「表現構造」(83-84) から紹介する。

It happened that John fell と John happened to fall という文は、どちらも「ジョンが倒れた」という出来事を表している。しかし happen という動詞は、本来、「(出来事が) 起こる」という意味の動詞であるから、「ジョンが倒れるという出来事が起こった」という意味で、It happened that John fell は自然であるが、John という人を主語にして、John happened to fall と言うのは不自然なはずである。しかし英語の場合、主語に John という人を使って、「ジョンが起こった」という使い方ができる。

この例は、英語という言語では、本来、出来事を意味するはずの動詞の主語に人を使うことができることを示している。つまり、英語という言語は、出来事(つまり「コト」)よりも、主語(つまり「モノ」)に関心があるということである。英語において注目の対象として選ばれ前面に押し出される「モノ」は、日本語では出来事全体を構成する一つの部分にすぎず存在感が薄くなる。そういう意味で、日本語という言語は「コト」的な言語だというのが池上の主張である。

Ⅲ. 「HAVE」的な言語と「BE」的な言語

「HAVE」的な言語と「BE」的な言語ということについて考えてみたい。再度、池上の「表現構造」(88-92) を参考にする。

「子どもが二人いる」という場合、英語では、John has two children と言うのがふつうである。一方日本語の場合、「太郎には子どもが二人いる」、「太郎には子どもが二人ある」と言い、「太郎は子どもを二人持っている」とは言わない。つまり日本語の場合、「所有して(持って)いるもの」を「存在(ある・いる)を表す形式」に転用している。それは、「この部屋は窓を二つ持っている」と言わずに、「この部屋には窓が二つある」と言うのと同じである。それに対して英語は、There are two windows in this room と言わずに、This room has two windows と言うのがふつうである。「所有」という概念は、本来「人間」という概念を介して初めて可能になるはずのものである。しかし英語では、have を使う「所有」の表現形式が強く確立されている

ため、人間的な概念が関与しない「存在」の表現にまで「所有」の形式が拡大適用されている。

たとえば、「コートに染みがついている」という場合、日本語では「存在」を表わす「いる」が用いられるが、英語では「所有」の表現を表わす形式を使って、You have stains on your coat あるいは Your coat has stains on it と have (has) を使う。

さらに、日本語では「頭が痛い」という現象も、英語では I have a headache と言ひ、頭痛という生理的現象までもが「モノ」化され、所有の対象としてとらえられている。日本語では、「頭痛を持っている」と表現するのはかなり不自然である。

「コートに染みがついている」という日本語の場合、省略されている主語の「あなた」は、「コートの染み」が「存在」する場所的な枠に過ぎないが、英語の表現では、文は明確な「所有」の形式をとっており、主語の「You」は「染み」を支配下に収めた所有者として提示される。このような意味で、英語は「HAVE」的な言語、日本語は「BE」的な言語だと言える。

IV. 文の主語の影響の及ぶ範囲

次に、文の主語の影響の及ぶ範囲について考えてみたい。以下の1～11の例文は池上の『「する」と「なる』』と『〈英文法〉を考える』から引いたものである。

1. 彼を行くように説得したけど、彼は行かなかった
- 1'. I persuaded him to go, but he wouldn't go.
2. それを燃やしたけれど、燃えなかった
- 2'. I burned it, but it didn't burn.
3. お湯を沸かしたけれど、沸かなかった
- 3'. I boiled water, but it didn't boil.
4. 宿題をしたけれど、終わることができなかった
- 4'. I did the assignment, but didn't finish it all.
5. 彼女が問題を解くのを手伝ったが、彼女は解けなかった
- 5'. I helped her solve the problem, but she couldn't solve it.
6. ボートを浮かべたけど、浮かばなかった
- 6'. I floated the boat, but it didn't float.
7. 屋外で冷凍食品を融かしたけど、融けなかった
- 7'. I melted the frozen food outdoors, but it didn't melt.
8. メアリーは溺れたけど、死ななかった
- 8'. Mary drowned, but she didn't die.
9. 10を3で割ったけど、割れなかった
- 9'. I divided ten by three, but I couldn't divide it.

10. それらを混ぜたけど、混ざらなかった

10'. I mixed them, but they didn't mix.

11. 彼を起こしたけれど、起きなかった

11'. I woke him, but he didn't wake.

1～11の例文はいずれも、英語の場合、主語が目的語に対して行った行為は、それが完了したことまでを意味する。したがって、1～11の英語の例文はすべて、意味としては矛盾している。「燃やしたけれど、燃えなかった」、「沸かしたけれど、沸かなかった」、「浮かべたけれど、浮かばなかった」に対応する英文は、文としてすべて不適格である。しかし、その日本語に不自然なところはない。日本語の場合、「燃やしたけれど、燃えなかった」、「沸かしたけれど、沸かなかった」、「浮かべたけれど、浮かばなかった」という表現はすべて適格な文である。つまり日本語の場合、動詞が意味する「行為」そのものだけに重点があり、それによって意図された行為が完了したかどうかまでは問題にされない。しかし英語の場合、「主語」の意図したところの結果までが動詞の意味範囲に含まれることがよくある。

もちろん、すべての動詞がそうであるということではなく、“kill”のように、英語でも日本語でも、動詞の意味にその行為が完了したことまでが含まれるものもあれば、“invite”のように、英語でも日本語でも、行為の完了を含まないものもある。

彼ヲ殺シタケレド、死ナナカッタ

I killed him, but he didn't die.

彼ヲ招イタケレド、来ナカッタ

I invited him, but he didn't come. (池上, 『「する」と「なる」』 267)

ただ、池上が指摘しているように、「両者の間で食い違いがある場合は、必ず日本語の動詞が結果の達成を含まなくてもよいのに対し、英語の動詞は結果の達成を含むという形になる」(池上, 「表現構造」97)。

英語は、「主語」としての「人間」の関与を特に際立たせて表現する傾向のある言語であり、日本語は、そのような形で「人間」をとらえることをできるだけ抑えるような表現を好む言語であるということが出来る。そういう意味で、英語という言語は、主語が支配する影響の及ぶ範囲が広い言語である。

V. 「スル」的な言語と「ナル」的な言語

池上は『日本語と日本語論』で以下のような例を挙げている。

日本語で、「天皇陛下ニオカセラレマシテハ、自ラ杉ノ苗ヲ植エニナリマシタ」(330)と
言うとき、文字どおりには、「天皇陛下」という「場所」において「杉の苗を植える」という出
来事が起こったという表現形式になっている。現実の出来事としては、「天皇陛下」はもちろ
ん行為をした主体であるが、「天皇陛下ニオカセラレマシテハ、自ラ杉ノ苗ヲ植エニナリマシ
タ」という表現では、「天皇陛下」という「動作主」が「場所」化され、「動作主」としての特
性を取り去られている。

電車の駅のアナウンスで、「後ろへお下がり下さい。13番線に電車が到着になります」とい
うアナウンスを耳にすることがある。「電車が到着になります」ということによって、この発言
にあたかも電車が勝手に到着するようなニュアンスを持たせ、電車が到着すると宣言する自分
の責任を回避する態度が感じられる(池上、『「する」と「なる」』198-99)。

同じことは、「私たちはこの度結婚することになりました」という発言にも伺える。結婚する
ということに関して、当然二人の主體的な意志決定が関与したはずだが、それは表に出ず、「私
たちはこの度結婚することになりました」という表現には、自分たちの意志を超えた何らかの
力によって私たちはそのような結果に立ち至ったという感じがする(池上、『「する」と「なる」』
198-99)。

また、「彼と結婚しちゃおうか?」のように、「誰が結婚するのか」という主語を省略し、結
婚という結果だけに眼を向け、自分の意志決定に由来する責任を回避する表現も多く見られる。
日本語は、「人間」をとらえることをできるだけ抑え、むしろ「人間」の力を超えた何かによっ
てある結果がもたらされるという形式の表現を好む言語だということができる(池上、「表現構
造」105)。

「太郎は億万長者になった」という表現も、涙ぐましい努力の結果に太郎が億万長者になっ
たのか(「動作主」として行為したのか)、予期しない遺産が転がり込んで億万長者になった(「非
動作主」だった)のかははっきりしない。このように「ナル」は、「動作主」を「非動作主」にす
るにはうってつけの動詞である。出来事の中で「個体」としての「人間」が「動作主」として
いかに自立的に働こうとも、「ナル」はその「個体」を出来事全体の部分とし、人間を出来事全
体の一部としてとらえる(池上、「表現構造」103-04)。この意味で、英語は「スル」的な言語
で、日本語は「ナル」的な言語だと言うことができる。英語では、「何者かが何かをする」のよ
うに表現しようとする傾向があるのに対して、日本語ではとにかく物事が「おのずからなる」よ
うに表現しようとする傾向がある。英語表現における特色を、かりに人間本位的と言うならば、
日本語における特色は、自然本位的あるいは非人間的ともいえる。

「表現構造の比較—〈スル〉的な言語と〈ナル〉的な言語」の最後で池上は次のように締めく
くっている。

自然の中に置かれた原始的な人間の姿を考えてみれば、それはおそらく自分を遥かに超え
た大きな自然の力に左右される覚束ない存在であったろうと想像される。そこにあるのは、

自分より大きな自然の力に順応することによって生きて行く人間の姿である。しかし、やがて人間が自らの力を自覚し、それを通じて自然に働きかけ、自ら望むようにそれを変えていこうとする段階が来る。そこでは、人間は自らの力に基づいて自主的に行動する姿をとって現われる……一方では、〈出来事全体〉を捉え、事の成り行きという観点から出来事を表現しようとするいわば「ナル」的な言語と、出来事に関与する〈個体〉、とりわけ〈動作主〉としての〈人間〉に注目し、それを際立たせる形で表現しようとする言わば〈スル〉的な英語という対立があるように思われる。(107-08)

VI. 最後に

以上、1)「モノ」的な言語と「コト」的な言語、2)「HAVE」的な言語と「BE」的な言語、3) 主語の影響の及ぶ範囲、4)「スル」的な言語と「ナル」的な言語という四つの観点から、英語的な表現と日本語的な表現について考えてきた。翻訳は、単に外国語が理解できれば可能になるものではなく、翻訳される外国語の特徴と母語の特徴を理解し、その二つの言語を自由に操れるようになって初めて可能となるものである。そのためには、翻訳される外国語についての理解だけでは十分ではなく、言語一般についてのより広い理解が必要不可欠である。

引証文献

- Hinds, John. *Situation vs. Person Focus*. 東京：くろしお出版, 1986.
池上嘉彦. 『「する」と「なる」の言語学』. 東京：大修館書店, 1981.
池上嘉彦. 「表現構造の比較—〈スル〉的な言語と〈ナル〉的な言語—」. 『日英語比較講座 第4巻 発想と表現』. Ed. 國廣哲彌 東京：大修館書店, 1982. 67-110.
池上嘉彦. 『〈英文法〉を考える』. 東京：筑摩書房, 1991.
池上嘉彦. 『日本語と日本語論』. 東京：筑摩書房, 2007.